

都市を生きる

建築

「都市を生きる建築」という連載タイトルに、これほどふさわしい建物も無いだろう。9階建てのビルの外壁に、全部で132個の植木鉢が取り付けられている。

ビルの名称はオーガニックビル。約20年前の1993(平成5)年に完成した。「オーガニック(有機的な)ビル」とは、まさに名は体を表すネ



オーガニックビル 32

デザインされた植物の「野生」

ーミング。今こそ「オーガニックフード」のように使われて馴染み深くなった形容詞が、いち早く建物名に採用されている。実際、壁面の植物は、近年推奨されるようになった壁面緑化の先駆けとみなせるかもしれない。

だが、オーガニックビルの植物は、そんな枠組みだけに収まりそくない。規格化され、飼いならされた自然と

いうより、もっと個としての存在感が強い。一つ一つ独立した植栽であることが、大きな理由だろう。それに、植木鉢の形状も半球形だったり、土管を思わせる形だったり、一様ではない。緑とコントラストをなす赤い壁も、思い思いの植物の姿を強調する役割を果たしている。

植えられた品種は、数十にも上る。すべて異なった種類

のように見えるのは、地上の緑と違って容易に剪定ができないから。水や肥料はコンピュター制御で細い管から各々の植木鉢に行き渡るのだが、枝ぶりや大きさは個々の生命力の賜物。オーガニックビルは人工的な技術とデザインで、植物の野生を際立たせているのだ。

現在、一般的な壁面緑化は、植物を人間が生存に必要な素材とみなし、一様で、コントロール可能なものとして処理する傾向にあると言える。それに対して、ここでの植物は抽象的な「緑」ではなく、計画の中に完全には収めることができない生物のように扱われている。同じ都市にいても、植物は人間と違ふ原理を持つ他者である。そんな設計者の思想は、植物が繁って室内を浸食したかのような1階工



上南船場で異彩を放つオーガニックビルの外観
右壁から突き出た132個の植木鉢には多様な植物が息づいている(撮影・西岡潔)

バブルは現在、単なるあだ花のように語られることが多い。しかし、江戸時代から続く老舗の手で今も生き生きと維持されているオーガニックビルの緑からは、心動かす遊びと思考の深みが近接していた当時の創造性が伝わってくる。いや、そう思うのはこちらの勝手な解釈。植物は何も人間のために存在しているわけではないのかもしれないけれど。
(倉方俊輔/建築史家・大阪市立大学准教授)

おおさか